NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 26・2012. 12.20

・「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベルⅡ～「陸前高田学校」～報告
・「修復のお仕事展Ⅳ」～伝えるもの・想い～　開催報告
・新しい公共～NPO／NGOの時代～　「歴史資料継承機構」
・Satellite Report
　九州支部設立報告
　関西支部　文化財ER続報
・事務局通信
　23年度NPO JCP決算／事業報告

現・陸前高田市立博物館（旧・生出小学校）前で記念撮影

被災した旧・陸前高田市立博物館

修復のお仕事展Ⅳ　会場風景

平成24年度

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベルⅡ
～「陸前高田学校」～報告

NPOJCPは、平成20年度から東京国立博物館との共催で、「文化財保存修復専門家要請実践セミナー」を開催しています。レベルⅠは基礎編として東京国立博物館小講堂にて開催していますが、レベルⅡは実践編として、現場で実際の文化財に触れ、実習形式で行っています。

今年は東日本大震災で全壊した陸前高田市立博物館を支援する意味も込めて、岩手県に会場を移し、7月30日から8月6日の日程で開催しました。今回のセミナーは、東京国立博物館に加え、陸前高田市教育委員会、陸前高田市立博物館、岩手県立博物館の共催で行いました。

受講生は全13名。その内の6名は、岩手県、群馬県、宮城県など、被災区域からの参加者でした。また、陸前高田市立博物館の職員13名が、講師となったり受講する側に回ったりという構成でした。

今回は、2名の受講生にセミナーの参加体験を寄稿して頂きました。

現・陸前高田市立博物館（旧・生出小学校）

「陸前高田学校」に参加して

熊谷　綾（東北大学文学部）

今年7月30日から8月6日に開講された『陸前高田学校』に参加した感想を書かせていただきます。

この講座を知ったきっかけは、宮城資料ネットのメールマガジンでした。昨年の夏に同団体の被災文書のレスキュー作業に参加して以来、津波で被災した歴史資料の保存・修復に接する機会がないかと思っていました。また私は陸前高田市出身なので、被災地となった故郷での開催に、大きな期待と不安をもって応募させていただきました。実際にセミナーを振り返ってみると、どの時間も印象深く濃密な一週間でした。

まず、二日間の基礎講義はいずれも今まで学んだことがない分野で、緊張しながら聞いていました。大学では日本史を専攻しているので、紙や染織物・カビなど、具体的なモノを扱う科学的な講義はとても新鮮に感じました。

とくに紙の特性についてのお話とカビについてのお話は、昨年の被災文書レスキューでの自らの体験と重ね合わせながら聞きました。歴史資料を保存するためには歴史学の知識だけでなく自然科学の技術も欠かせないと改めて実感しました。

その後三日間の実習では、陸前高田市立博物館と海と貝

貝類標本の保存処置を学ぶ熊谷綾さん（左）

民俗資料の安定化処置を学ぶ

のミュージアムの被災資料の安定化処理を経験しました。民具や貝類標本、掛軸、洋書などは触れることすら初めてで、しかも海水損やカビによって弱くなった資料なので、恐る恐る作業してしまいました。

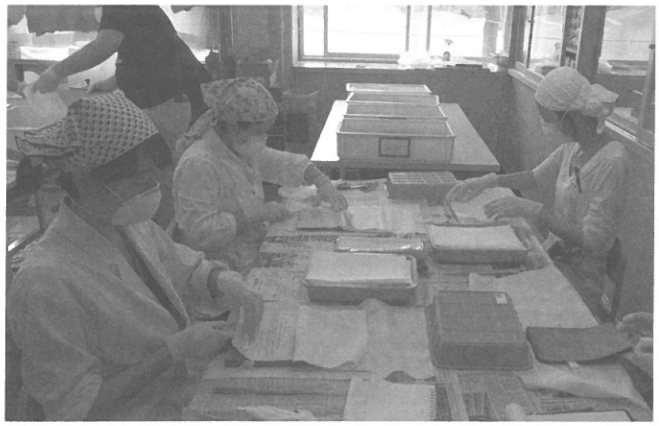
安定化処理の作業工程は、陸前高田市立博物館の方々が実際に処理を進めながら変更を重ねていました。マニュアルが確立していない一方で、早期に処理をしなければ資料が失われてしまうという厳しい状況の中、外部からの受講生を受け入れてくださった陸前高田市立博物館の方々のご協力には、たいへん感謝しております。

それから8月4日は紙本・書籍保存修復士の金野先生と、自衛隊第9偵察隊長の前田先生の特別講義でした。大船渡市出身の金野先生は、個人資料のレスキューという地域に密着した活動をなさっていました。私自身も陸前高田市出身者として、自分なりに歴史資料と関わっていく方法はないかと考えていましたが、金野先生のお話は地域に根差した専門家のあり方を教えてくれるものでした。

また、前田隊長のお話からは緊急時の資料レスキューには専門的な知識や技術だけでなく、臨機応変な判断やそれぞれの専門にとどまらない人と人の付き合いが欠かせないということを感じました。

最終日は岩手県立博物館での見学と講義でした。見学した中では、とくに真空凍結乾燥機が印象に残りました。こうした大規模な装置は県立博物館などの限られた施設でしか利用できないものだと思います。周辺の市町村に専門的な機器を備えるのは難しいですが、施設同士のネットワークを強めることで迅速で確かな資料保存を行うことができると学びました。

最後に、今回の実習や見学では、さまざまな資料を見ることができましたが、その中には見覚えがあるものがいくつかありました。とくに海と貝のミュージアムの貝類標本は子どもの頃にスケッチしたことがあったので、再会できて嬉しく思いました。岩手県立博物館に展示されていた土偶も、高校の授業でスケッチしたものでした。多くの人が思い出を失った被災地にとって、博物館資料や個人資料はよりいっそう代替のきかないものとなっているのではないでしょうか。



洋書の安定化処置を学ぶ

最終日、岩手県立博物館に場所を移しての講義。講師は同館第二学芸課長、赤沼英男先生。

一方で、陸前高田市はいまだ博物館を含む社会教育施設を復旧できる状態にはありません。今は何を優先するべきなのか、被災地の人間としては戸惑うこともあります。

今回の『陸前高田学校』では、多くの方々と出会いかけがえのない経験をさせていただくことができました。歴史を学ぶ者として、陸前高田市民として、自分がしたいことをすり合わせて考える大きなきっかけとなりました。ご協力・ご支援をいただいた講師の先生方や、陸前高田市立博物館、岩手県立博物館職員の皆様、JCPのスタッフの皆様、そして受講生の皆様にお礼を申し上げます。

「セミナーに参加して」

芦田　寿子（NPO JCP学生会員）

最近の報道でも陸前高田市の海岸一帯の嵩上げについて、取り上げられています。しかし、嵩上げ用の土砂そのものの確保や運搬・人件費など実現には多くの問題を抱えているため、遅々とした進み具合だと聞くたびに、暗澹とした気持ちになります。

追い打ちをかけるように、嵩上後の地盤の強度は（建設に）足りているか、区画整理と難題は山積みで、人の住める状態に戻るまで一体、何年、何十年かかるのでしょう。こんなにも長い時間、人が一生涯、その生きる時間の殆どを尽きぬ難題と付き合わねばならない、当事者の精神の疲弊・磨耗は想像を絶します。

受講中にも嵩上げ問題について何度か話題に登ったのをおぼえています。ある先生は「50年……それ以上、もっと（時間が）かかるかもしれない」と予想をされていました。

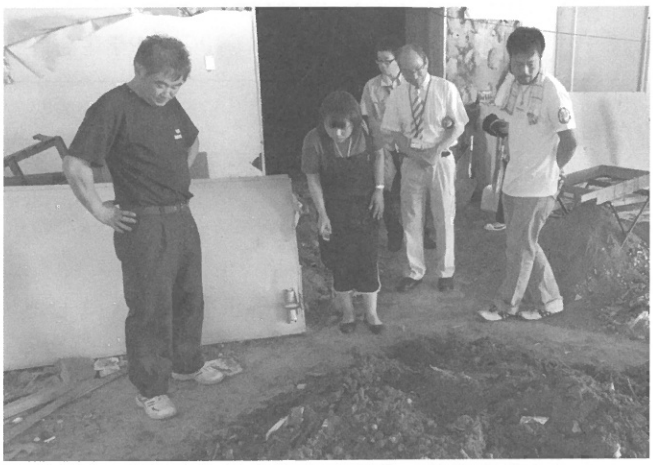
恐ろしい自然災害から生き延びてくれた人たちは、現在、仮設住宅など元の生活圏内から離れて暮らすことを余儀なくされています。これが長期化すればするほど、生活基盤は避難先で形成され、その土地からの移動は難しく、「ふ

るさと」へ戻るのは困難になるでしょう。一般的に考えてみても、築き上げた生活基盤を放棄することは、相当の覚悟を必要とするものです。

津波によって人も建物も道路のアスファルトも流され、かろうじて津浪に耐えた建物も使用できる状態になく、取り壊さざるをえません。その上、嵩上げ等の区画整備も本格的に入れば、わずかにのこっていた震災前の街の面影や生活の痕跡、その殆どは失われてしまうでしょう。人命にとどまらず津波は、こういった人々の暮らしていた日常や生活の跡までをも破壊していく事実に、現地に行って、現地の人の言葉を聞いて漸く気づくに至りました。

そういった環境下に身を置きながらも、冷房もない廃校の中で、「自分たちは陸前高田市と、一蓮托生」の覚悟で日々、高田の歴史や文化の復元に尽力する人々の姿は忘れられません。また、この廃校へ一時避難として運ばれてきた陸前高田市立博物館の資料は、損傷・汚損し、痛ましい状態でした。これらの資料は9割9分が市民からの寄贈によるものだそうで、内容は大型の民具・写真・録音盤、中にはコレクター品と多彩に富んでいます。種類が豊富であればあるほど、よりいっそう強く、市民の「伝えたい」「残したい」という思いや、それを受けとる側の熱意を感じずにはいられません。

博物館と隣接して建っていた市立体育館内の惨状


被災した陸前高田市立博物館内部。左は熊谷賢主任学芸員

現在博物館となっている旧・生出小学校体育館に集められた被災史料

名勝・高田松原の「奇跡の一本松」の保存処置については、費用の問題で批判も多かったように思います。私も反対派の一人だったころは、一本松を「植物の松」くらいの認識でしか見ていませんでした。しかし、それは大きな誤りで、現地の人の眼には植物としてではなく、別のものが見えているのではないかと思うのです。唯一残された日常の欠片である一本松を媒介として、震災前の在りし日の陸前高田市の姿を、一緒に過ごした人との思い出や町の匂い、季節毎の雰囲気だとか、各々の陸前高田が映し出されているのではないでしょうか。松はいわば、そのための装置であって「一本松」の視覚的な部分のみの認識とは違うのです。

もともと、ひときわ大きな松として人々の注目を引いていた松と聞いています。津波でいなくなってしまった人たちも、きっと一度は目にしたはずです。その人たちも見たであろう松を見ることによって、「思い」や「気持ち」を共有できるとも言えます。

そういった生にもたらす意味や力は、その松が震災前も、その後も同じ場所・変わらぬ姿で存在することによって生じるならば、それは人の心の拠り所ともなりうるでしょう。

何十年かかるかわからない、終わりの見えない努力を続けねばならないなら、心の支えは必要不可欠だと思います。

学生時代の講義で聞いた岡倉天心の話が、やけに思い起こされます。「美術品や文化財というのは、ただの物体ではなく、人びとの1000年前、500年前なりの精神が形となってそこにあるものなのだと。 人びとは、それに触れることによって今の時代に生きながら、過去の人びとの精神と交流ができる、 それこそが天心の考える文化財の本質である」。

はしくれとはいえ、学芸に身を置くものの一人として「文化財とは何か」という問いかけを常に忘れずにありたいと、改めて強く思う次第です。

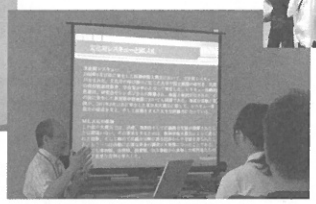
「陸前高田学校」ダイジェスト

第1日目：2012年7月30日（月）

AM　市庁舎にて開校式→被災現場訪問、献花

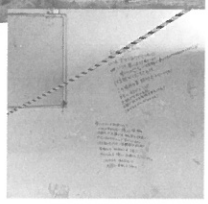
陸前高田市役所にて開校式

陸前高田市教育委員会教育長山田市雄様による開会挨拶



神庭信幸先生による基礎講義「臨床保存」

被災した陸前高田市立博物館外観



上・被災した体育館・公民館。下・公民館の壁に書かれた亡くなった肉親への思い。

博物館の入り口にて献花

PM　石井美恵先生「染織品の保存について」

被災した博物館から救い出した資料を用い、応急保存処置法の講義。左写真中央右側が石井先生。

第2日目：7月31日（火）

AM　増田勝彦先生「紙の特性について」

PM　高島浩介先生「カビについて」／意見交換会

天然空調のため、2階音楽室での講義はあまりにも暑く、午後は調理室に場所を移して講義を行いました。

第3日目：8月1日（水）

AM　「民具の安定化処理」

陸前高田市博物館学芸員の及川甲子先生（左）と、民具の安定化処理を学ぶ受講生たち

PM　「貝類標本の安定化処理」

貝類標本の安定化処理を指導する、後藤悦子先生（左写真中央）、菅野春子先生（右写真中央）

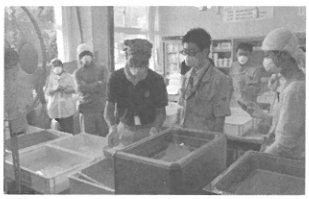
第4日目：8月2日（木）

AM　「掛け軸の安定化処理」

掛け軸の安定化処理を指導する、東京国立博物館アソシエイトフェロー　鈴木晴彦先生（左写真中央）

第5日目：8月3日（金）

AM　「洋書の安定化処理」



洋書の安定化処理を指導する、砂田比左男先生（左写真中央）、鈴木綾先生（右写真・手前右から2人目）

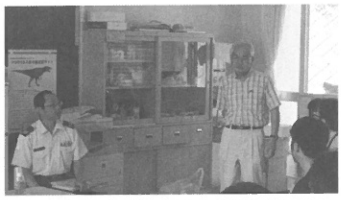
第6日目：8月4日（土）

AM

特別講義　金野聡子先生

「東日本大震災における個人被災資料の初期救済について」

被災資料を見せながら講義をする金野聡子先生（紙本・書籍保存修復士・写真中央）



右・本多文人陸前高田市立博物館館長

特別講義　前田浩士先生

「東日本大震災における自衛隊の活動」

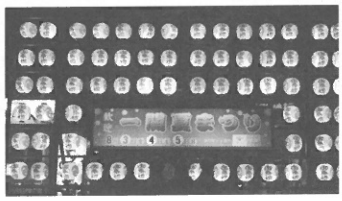
被災直後の救援の模様を講義する自衛隊第9偵察隊長　前田浩士先生

PM　全員でのディスカッション

博物館を支援しているボランティア団体ルシャキパルによる「希望の鳩を飛ばそう」プロジェクト

懇親会～校庭でバーベキュー／夜は一ノ関夏祭り

タイトル：仲良し
（前田隊長と熊谷賢主任学芸員）



一ノ関 磐井川の花火

第7日目：8月6日（月）

AM　岩手県立博物館へ移動

～PM　見学／講義

赤沼英男先生「被災古文書関係資料の真空凍結乾燥法による安定化処理」

目時和哉先生「被災民俗資料の安定化処理について」

藤井千春先生「津波被害昆虫標本処理の技術的な課題とその記録」

鈴木まほろ先生「岩手県における生物標本のレスキュー」

神庭先生による修了証書授与

県博に無償で貸し出されている冷凍車

岩手県立博物館の先生たち
上から、目時和哉先生、鈴木まほろ先生、藤井千春先生

謝辞：

今回のセミナーは、たくさんの方々に支えられて実現できました。

まずはお忙しい中、私たちを受け入れて下さった陸前高田市立博物館様、岩手県立博物館様、共催者として協力して下さった陸前高田市教育委員会様、後援団体各位、中でも助成を賜りこのセミナーを実現に導いてくださった（公財）文化財保護・芸術研究助成財団様に厚く御礼申し上げます。また、宿泊のみならず花火大会の送迎などで我々をもてなして下さった一関プラザホテルの高橋様、ボランティア価格で毎日陸前高田まで送迎して下さった一ノ関グリーン交通様にこの場を借りて心より御礼申し上げます。

芸工展2012
「修復のお仕事展Ⅳ」～伝えるもの・想い～ 開催報告

伝世舎※主催による「修復のお仕事展」は、今年で4回目を迎えます。今年は、NPO法人たいとう歴史年研究会が保管管理している旧平櫛田中（ひらくしでんちゅう）邸（東京台東区上野桜木）のアトリエを会場として開催しました。

出展者は毎年少しずつ変わりますが、核になっているのは東洋絵画修復（伝世舎）、油絵修復（武田理恵、中右恵理子）、西洋絵画模写（土師宏）、仏像彫刻修復・制作（柿田喜則）、染織品保存修復（山崎真紀子）、埋蔵文化財修復（石原道知）、埋蔵文化財調査（原祐一）、建造物保存活用（もば建築文化財研究所）、保存修復品製造販売（株式会社パレット）の面々。そして今年は新たに洋紙修復の鈴木香里さんが加わりました。

JCPは第1回目から出展。今年も修復家の仲間と共に、JCPの活動を紹介させていただきました。JCPの活動は、上記のような修復技術者や専門家を繋ぎ、その力をお借りして行っています。このような場に参加することで、JCPのコーディネーターとしての立場もより明確になるように思います。

今回は住宅街の真ん中で、分かりにくい会場にもかかわらず、大勢の来場者をお迎えすることができました。皆様大変興味を持って説明を聞いて下さいましたが、それ以上に、出展者がお互いに未知の領域を知り、啓発される機会となったと思います。

今回は伝世舎による同展の紹介に加え、解説ボランティアとして協力していただいた江幡照子さんの「田中邸」体験記をお届けいたします。

「修復のお仕事展」は来年もこの時期に、谷中のどこかで開催します。下町散策がてら、是非お立ち寄りください。

「芸工展」と「修復のお仕事展」

伝世舎

芸工展は「まちじゅうが展覧会場」をキーワードに、東京都台東区谷中・上野桜木・池之端、文京区根津・千駄木界隈で参加者が主体となって展開するイベントで、今年で20回目を迎えました。

元々はまちづくりの一環としてのイベントとして始まり、「谷中芸工展」として発展してきましたが、地域の広がりによってタイトルから「谷中」を取り、現在に至っています。

参加者は、彫金、鼈甲、木工といった地域に根付く職人のほか、点在するギャラリーやアトリエ、自宅の一室を公開して行う展示、町なかでのワークショップなどの企画からなり、100を超える企画が同時多発的に実施されています。今年は10月6日（土）～21日（日）まで3週間にわたって開催されました。

NPO JCP発表

元々は個人で参加をしていましたが、4年前に「修復の仕事を皆に分かるように紹介したい」という思いで「修復のお仕事展」を企画しました。

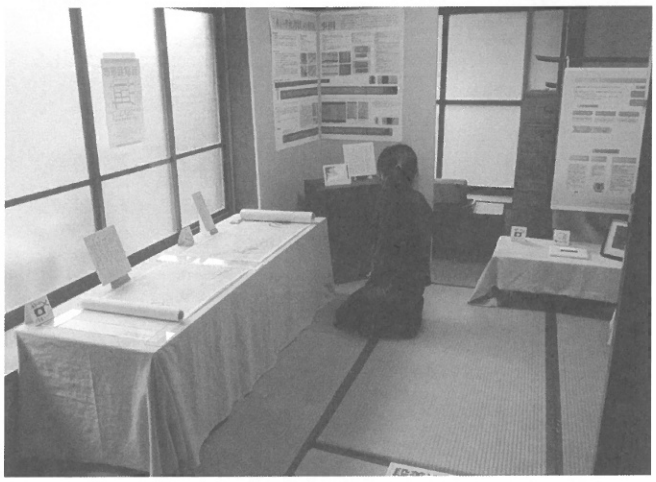
企画に当たっては「なるべく多くの業種」を集め、「信頼できる仕事をしている若手から中堅の技術者」で構成しようと思いました。その結果、1回目は油絵修復、建造物保存活用、染織品保存修復、東洋絵画修復、保存修復支援、保存修復品製造販売、模写（日本画）、埋蔵文化財公開・活用、埋蔵文化財修復の9種の参加を得ることができました。

その後、仏像修復や洋紙の修復、模写が油絵になるなど、多少メンバーが変わりつつ今年にいたっています。

今年のそれぞれの展示テーマを紹介します。

油絵修復は「絵具層について」。油絵は5回を想定して、支持体から表面までの各層を順番に紹介しています。建造物保存活用は茨城県大子町に残る板倉を中心にした保存活用と人材育成。紙本保存修理は実際に紙を展示しながら、小学生にも分かるように仕事の紹介。西洋絵画模写はレンブラントの「トゥルプ博士の解剖学講義」の模写と技法の解説。染織品保存修復は染織品の展示方法の紹介。東洋絵画修復は巻子（巻物）の修復事例。東洋絵画は掛け軸、和額、屏風を紹介し、次回の冊子で完結します。保存修復支援は活動内容紹介とともに、陸前高田での被災文化財の支援活動の報告。保存修復品製造販売はミュージアムクリー

※伝世舎：東洋絵画・書跡の修復保存専門家であり、JCP登録会員でもある三浦功美子氏が主宰する修復工房。



会場風景（旧・平櫛田中邸アトリエ）

ナー等の修復機器の紹介。仏像彫刻修復・制作はさすがに毎回仏像を持ってこられないので、蓮華に古典技法を取り入れ制作した作品を展示。埋蔵文化財公開・活用および修復は、東京大学浅野地区で発掘された「方形周溝墓」の保存について、実物大の部分模型を中心に展示しました。

毎年来て下さる方も増え、特に今年は旧・平櫛田中（でんちゅう）邸アトリエを会場にすることができ、建物の価値にも助けられて8日間で400名弱の来場を得ることができました。

来年の5回目をもってひとまずこの企画を修了しますが、再来年以降はまた、別の形で続けていこうと思っています。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

「修復のお仕事展」ボランティアに参加して

江幡　照子（NPO JCP会員）

正面玄関を入ると、なつかしさに包まれる。昔はどこにでも見られたたたずまい。下駄箱の引き戸に上がり框（かまち）。目を凝らすと板が古びて　不規則な木目が浮き出ている。なんとも味わい深い！

この家は大正8年築。田中（でんちゅう）さんが大作「転生」制作にあたり、広い空間が必要だろうと横山大観、下村観山、木村武山の支援で、まずアトリエが建てられた。同11年（1922年50歳）には隣に母屋を建て増し、以後昭和

旧・平櫛田中邸外観

45年に小平市に転居するまで、70年以上家族と生活を共にした。アトリエは「真北に高い天窓のトップライト」が大きな特徴、安定した自然光を取り入れるためアトリエと母屋を斜めの角度でつなげ、アトリエに入る光線の具合を考えて設計されている。アトリエ建築のさきがけといわれる。壁面の西と南には天井までの作り付けの本棚。彫刻と読書に専心した田中さんらしい質実剛健そのものの空間。贅沢をせず木彫に打ち込んだ人生をうかがわせる。

10月7日～14日「修復のお仕事展Ⅳ」はこのアトリエで開かれた。日本の近代木彫界に大きな足跡を残した田中（でんちゅう）さんが毎日毎日研鑽を積んだ空間に、出品者の労作が何の違和感もなくしっくりと溶け込んでいる。

隣の母屋は横山大観邸を手がけた大工によるものといわれる。一階は茶の間、二階は床の間付和室、手伝いにうかがった10月10日(水)は秋とは名ばかり、暑い日でした。外の喧騒とは全く無縁で森閑としている。間仕切りの襖は開け放たれ、広々として、ひんやりとした畳の間に、手足を思いっきり伸ばし、大の字に寝転がりたい衝動にかられる。大正期の典型的な大工技術、住宅建築の文化を忍ばせる建物である。

旧平櫛田中邸は東京芸術大学名誉教授だった平櫛田中先生が住居兼アトリエとしていた建物で、現在は東京上野桜木の貴重な歴史文化遺産として、地域の人々に親しまれている。10月10日の日も、ポツリポツリと近隣のご老人がみえ、むかしばなしをしていかれた。「私はすぐそこに住んでいます、でんちゅうさんを覚えていますよ、玄関先のこの木は葉っぱが落ちて、掃除が大変、でも今は枝を払って、そんな心配もなくなったね」

1階の茶の間の入り口。鴨居に下げられている紺色木綿の暖簾には「いまやらねばいつできる　わしがやらねばたれがやる」と書かれていて、人々に座右の銘として親しまれてきた。90歳で文化勲章、98歳（昭和45年）で小平へ引越し、百歳を迎える前に、向こう30年分の材料を買い込んだという話も残っている。「六十、七十は洟垂れ小僧　男盛りは百から百から」。108歳で生涯を閉じられた。

A4裏表3頁にびっしり書き込まれた年譜が茶の間のちゃぶ台に置かれている。作品の写真集をのぞいてみる。来る日も来る日ものみをにぎる、でんちゅう先生の姿が脳裏に浮かぶ。

自分たちの生活する地域はかけがえのない一つのコミュニティー、一つの単位として捉えてみる。魅力的な地域にするには、かつては地域の屋台骨として地域を支えていた歴史的建造物の「固有の」魅力を再発見・再評価してみる。専門家の力を借り、保存・活用をする。地域を巻き込み歴史的建造物と景観を活かして、新旧の調和のとれた「自分たちの街」を自分たちで活用していく。それによって地域の活性を図ることができる。その心構えこそが精神的にも質的にも、個性的で真に豊かな社会・美しい都市景観づくりに役立ち、未来へ繋げていくことになるのではということを実感できた気がします。参加させて頂いた　NPO文化財保存修復機構に感謝します。平櫛田中さんに出会うことができました。

新しい公共～NPO／NGOの時代～

NPO法人歴史資料継承機構

茨城史料ネットへの支援と地域史料

武子　裕美（NPO法人歴史資料継承機構）

NPO法人歴史資料継承機構は、地域に残された史料を調査・保存・修復・活用を行っている団体である。2006年に登記し、現在進行途中のものも含め、これまでに静岡で6件、東京都で4件、茨城で3件、千葉県で1件の史料郡を整理してきた。また、このほか、茨城史料ネット（茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会）の活動支援も行っている。今回は茨城史料ネットの活動と支援について簡単に述べたい。

茨城史料ネットは東日本大震災を受け、2011年7月に発足した。茨城県内外の資料について、蔵出し・調査・保存・活用を行っている。活動の中心は茨城大学中世史高橋修ゼミである。そのため、当法人では特に近世・近代史料の調査・保存活動に積極的に参加している。茨城県では甚大な津波被害はなかったものの、3.11以後の余震で蔵などが被災している。特に北茨城史平潟地域では多くの蔵が取り壊しとなった。しかしその蔵々には未整理の史料が多く残されており、平潟地域の歴史を語る上で重要な史料が失われようとしていた。震災後、茨城史料ネット事務局となる学生がこの地域を廻り、史料の救済を呼びかけ、ようやくそれに応じた数件の蔵から取り出し作業が行われた。

茨城大学での作業風景

平潟地域の史料は現在までにほぼ整理作業は完了している。整理を行った史料から、平潟地域を中心とした東日本の海運の利用や、流通の様子が見られる。詳細な研究は今後それらの史料を分析する必要があるが、もしもこの史料群が失われてしまえば、今後平潟地域の近世から近代にかけての歴史が分からなくなってしまっただろう。

このように、震災をきっかけとして史料が失われていく様子は、皆さんもよくご存じだろう。しかし史料が失われるのは災害だけではない。地震・火事はもちろんだが、家の建て替え、代替わり、そして大掃除も史料が失われるきっかけとなる。史料は興味のない人にとっては、読めない・薄汚い・場所をとる邪魔なものであろう。しかし、その中身を紐解いて行けば、そこにはそれを記した人々の様子が垣間見えるのだ。史料は古いものだけが重要なのではない。祖父母、両親、そして自分のものでも、1点1点が重要な史料である。例えば、今戦前戦後の事を語れる人がどれ程残っているだろう。10年20年前であれば明治生まれや大正生まれの人もまだ多く存命だった。しかし平成も四半世紀経過しようとしている。人々の歴史をつなぐ史料をのこしていくため、今後も史料整理活動を行っていく。

参考：

NPO法人 歴史資料継承機構URL：
http://rekishishiryo.com/

茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク準備会：
http://ibarakishiryou.web.fc2.com/

サテライト・レポート

NPO JCP　九州支部設立のご報告

平成24年6月23日の定例総会において、九州支部の設立が承認されました。

本格的な修復作業が始まった山本作兵衛の作品＝福岡県大牟田市の九州国立博物館で23日、渡野仁子撮影

九州国立博物館　作兵衛の作品 修復始まる

国内で初めてユネスコの「世界記憶遺産」に登録された福岡県・筑豊の炭坑絵師、山本作兵衛（1892～1984年）の絵画などの修復作業が23日、同県大牟田市の九州国立博物館で始まった。所蔵する同県田川市が3年がかりで修復とレプリカ作製に取り組む。

作業は、文化財保存修復が専門のNPO文化財保存支援機構（東京）に委託。同機構によると、作品の多くは劣化しやすい西洋紙（酸性紙）を使用。水彩画の7割には補強のためテープが貼られ、日記の一部もぼろぼろの状態だった。専門家が修復処置を施し、絵画はレプリカも作るという。

世界記憶遺産への登録は、田川市所蔵の697点（うち絵画585点）と県立大保木（所有権は遺族）の70点の計667点。うち市は劣化の進んだ323点を作業場所の整った九国博に移送した。来年度は残る304点も移し、14年度中に作業を終わらせる予定。【荒木俊雄】

毎日新聞朝刊27面（2012年7月24日）

24年度の主な事業としては、福岡県田川市所蔵　山本作兵衛コレクション304点の保存処置を行っています。同作品は筑豊の炭鉱夫山本作兵衛が、明治末期から戦後にかけて炭鉱の様子を描いたもので、2011年5月、日本で初めてユネスコの世界記憶遺産に登録され、一躍脚光を浴びました。

同作品は画用紙などに描かれた水彩画、墨画で、それ以外にも自筆原稿やノート類なども含まれています。資料類の中には保存が難しい当時の粗悪な紙が使われているものもあります。現在、九州国立博物館内修理室において、大林賢太郎副理事長（兼関西支部長、京都造形芸術大学准教授）をリーダーに、着々と作業を続けています。この保存修理作業と並行して、コロタイプによるレプリカ作りが便利堂によって進められています。

関西支部　京都造形芸術大学　日本庭園・歴史遺産研究センター／NPOJCP　関西支部共催

「文化財ER」続報

JCPの関西支部では、昨年度に引き続き京都造形芸術大学日本庭園・世界遺産研究センター歴史遺産研究部門と共催で、宮城県、岩手県の被災文化財保存修復支援を行っています。

現在、宮城県大崎市のガラス乾板、大和町の天皇寺の襖など、岩手県大船渡市の個人所蔵の近世近代文書、写真資料、襖、屏風などをNPO宮城史料ネットを通じてお預かりしており、会員が学生達と共に保存処置に当たっています。なお、この保存処置費用の一部は、皆様にお寄せいただいた寄付金を活用させていただいております。

ご報告と共に、心より御礼申し上げます。

JCP事務局通信

平成23年度 NPOJCP決算／事業報告

平成23年6月23日、台東区立浅草文化観光センターにて開催された平成24年度定例総会で、23年度決算、事業報告が行われ、23年度も恙無く運営できたことが報告されました。この場をお借りして、ご支援いただいております会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成23年度決算報告

・当期収入計	¥60,405,350
・当期支出計	¥59,802,859
・当期収支差額	¥602,491
・前期繰越収支差額	¥1,310,618
・次期繰越収支差額	¥1,913,109
・前期正味財産	▲¥4,667,571
・当期正味財産増加額	¥4,359,923
・正味財産合計	▲¥307,648

平成23度事業報告（平成23年4月1日から　平成24年3月31日まで）

(1) 特定非営利活動に関する事業

事業名		内容	実施日時	実施場所	受益対象者の範囲	
文化財保存技術の研究開発	装こう分野の修復全般にわたる教科書作成作業	文化時保存担当者、研究者、教職にある者等外部の関係者への参考資料として、正確かつ充分な内容の情報を提供し、また、技術者自身の指標ともなりえるグレードのテキストの編集企画とコンテンツを提供する。	23年4月1日～24年3月31日	会員の自宅その他	装こう関係修復技術者・大学等教育関係者	関西支部
災害救援活動	東日本大震災被災文化財救援事業	3.11震災発生直後からの募金活動、情報発信、京都造形芸術大学との共催「文化財ER」、救援委員会の要請に基づく陸前高田市立博物館被災文化財調査、拓本安定化処理作業支援。	23年3月14日～24年2月20日	京都造形芸術大学岩手県陸前高田市旧生出小学校、岩手県奥州市埋蔵文化財調査センター	主に岩手県被災地の文化財所有者	関西支部／本部
国際協力	ツタンカーメン展展示品の保存・修復に関する助言等の業務	NPO法人イシスコミッティ企画、フジテレビジョン株式会社主催の「ツタンカーメン展」における、展示品の保存と修復に関する助言業務。契約相手はイシス・コミッティ。	23年12月16日～毎日	大阪天保山特設ギャラリー	フジテレビジョン、一般市民	本部

事業名		内容	実施日時	実施場所	受益対象者の範囲	
文化財保存修理専門家の養成,研修事業	文化財保存修復専門家養成実践セミナー（レベルⅠ・Aコース）	専門家を目指す学生、若手技術者を対象とした、文化財の保存修復全般にわたる実践的セミナー。21年度受講者を対象にレベルⅠの後期を開講。	23年9月1日～9月11日	東京国立博物館小講堂	文化財保存修復の専門家を目指す若手技術者及び学生	本部
	文化財保存修復専門家養成実践セミナー（レベルⅡ・Bコース）	専門家を目指す学生、若手技術者を対象とした、文化財の保存修復全般にわたる実践的セミナー。	23年10月26日～11月2日	登録有形文化財市田家住宅	文化財保存修復の専門家を目指す若手技術者及び学生	本部
	行政文書	行政文書保存処置支援	通年	京都造形芸術大学		関西支部
	国宝修理装こう師連盟支援	国宝修理装こう師連盟の事業の支援。	通年	九州国立博物館、その他		関西支部
	トルコ世界遺産スタディツアー	専門家講師と共に、トルコアナトリア地方、イスタンブールなどの世界遺産を見学。	23年9月27日～10月4日	カマン・カレホユック遺跡、カッパドキア、サフランボル、イスタンブールなど	世界遺産に興味を持つ会員及び一般市民	本部
	栃木県文書館　講師派遣	公文書、古文書の適切な保存と利用についての必要な知識と技術の普及を図る講習会に講師を派遣。	23年10月5日	栃木県庁舎	栃木県市町文書保存担当者	本部

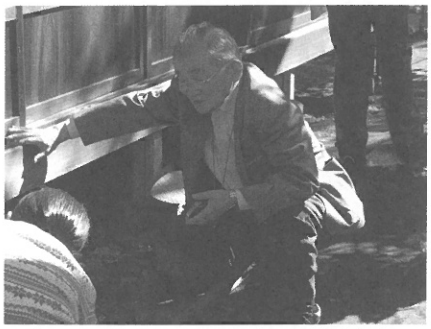
(2) その他目的を達成するために必要な事業

事業名		内容	実施日時	実施場所	受益対象者の範囲	
情報の発信	シンポジウム「今、文化財が社会にできること」	朝日新聞文化財団から助成を受けて行ったシンポジウム。東日本大震災を受けて、文化財救援事業のアピールも盛り込む。さらに各分野の文化財修復のパネル展示を行う。	23年1月7日～8日	東京大学弥生講堂	一般市民	本部
情報の発信	ニュースレター発行	情報誌「NPO JCP NEWS」No.24発行	通期	当機構事務局	会員、文化財関連団体	本部
情報の発信	谷中芸工展出展	谷中地域のお祭り谷中芸工展にて伝世舎主催「修復のお仕事展」に参加。活動の紹介を行う	22年10月	台東区言問い通り沿いギャラリー	会員、文化財関連団体	本部
その他	文化財保存修復学会運営協力	文化財の保存修復専門家が多数所属する学会の運営協力支援	通年 通期	本部事務局	学会員	本部
その他	六法美術運営協力	模写を専門とする六法美術の事務を受託			六法美術従業員	関西支部
相談受付、技術者紹介	中国書跡　巻子、手紙、掛け軸、扁額、木彫、浮世絵、人形の衣装、油絵、家具、工芸品など14件	主に専門家を紹介して欲しい、というメール、電話での相談に応じる。	随時	当機構事務局	相談者	本部
講演依頼		文化財保存修復学会　公開シンポジウム「文化財をまもる」－文化財を災害からまもる－	平成23年12月3日	東京国立博物館大講堂	シンポジウム実行委員会／シンポジウム参加者	

訃報：伊原惠司（いはらさとし）先生

（文化財建造物保存修復専門家、NPO法人文化財保存支援機構 評議員）

当機構の評議員　伊原惠司先生は、かねて病気療養中のところ、2012年9月8日に逝去されました。享年82歳でした。



平成23年「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」レベルⅡ
民家のIPMについて講義をする伊原惠司先生

伊原先生は、文化庁文化財保護部建造物課、東京国立文化財研究所（現・（独法）東京文化財研究所）修復技術部長を歴任されたあと、（財）文化財建造物保存技術協会に移られ、理事・参与を務めました。当機構においては、2002年から理事、2010年からは評議員に就任されていました。官民双方を経験され、広い視野を持たれた先生の存在は、NPO組織にとって大変貴重なものでした。

個人的なことはありますが、筆者は東文研時代から公私に渡ってお世話になり、懐の深い先生のお人柄にいつも勇気付けられたものです。

先生は晩年まで東本願寺の修理に携わられ、入院されるまで東京と京都を往復する日々を送っていらっしゃいました。また東京藝術大学で教鞭を執られ、優秀な教え子がたくさん巣立っています。

先生の蒔かれた種が、見事な花を咲かせますように。生前のように、いつもにこにこと、天国で見守っていてくださることを信じています。

どうぞ安らかにお休みください。

八木　三香（NPO法人 文化財保存支援機構事務局長）

ご入会ありがとうございました。

（平成24年12月1日現在入会者数）

■理　　事　　8名
■登録会員　　171名
■学生会員　　62名
■監　　事　　1名
■評 議 員　　2名
■賛助会員　　29件
■維持会員　　15名
■一般会員　　109名

株式会社　宇佐美松鶴堂
株式会社　宇佐美修徳堂
株式会社　岡墨光堂
株式会社　絵画保存研究所
株式会社　桂文化財修理工房
財団法人　元興寺文化財研究所
京都造形芸術大学　日本庭園・歴史遺産研究センター
国富株式会社　長崎営業所
株式会社　芸匠
株式会社　光影堂
一般社団法人　国宝修理装こう師連盟
株式会社　坂田墨珠堂
株式会社　修護
株式会社　修美
株式会社　松鶴堂
宗教法人　正法院
中部資材株式会社
株式会社　東都文化財保存研究所
日本通運株式会社　美術品事業部
株式会社　半田九清堂
長谷川　聡
百元　節
株式会社　フレンドトラベル
株式会社　文化財保存
山領絵画修復工房
他　個人4名
（アイウエオ順）

NPO JCPの活動に参加してみませんか？

■**登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■**一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

■**賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■**学生会員**：年会費　3,000円
大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典　・季刊情報誌の送付
・講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。
TEL. 03-3821-3264　FAX. 03-3821-3265
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org
URL：www.jcpnpo.org

※現在JCPでは、東北地方その他の被災文化財救援募金を受け付けております。
ご連絡いただければ、振込み料無料の振込用紙をお送りいたします。
皆様の暖かいご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。
・郵便振替　00120−4−10545　NPO JCP
・三菱東京UFJ銀行　四谷三丁目支店
普通預金　3960340
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
理事　三輪嘉六
・みずほ銀行　根津支店
普通預金　1727893
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS
第26号
2012年12月20日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒110-0008
台東区池之端4-14-8　ビューハイツ池之端102号
TEL：03-3821-3264　FAX：03-3821-3265
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org
関西支部
京都造形芸術大学
日本庭園・歴史遺産研究センター内
TEL：075-791-8519

〈理　　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）　西浦 忠輝（副理事長）
増澤 文武　沢田 正昭　増田 勝彦
三浦 定俊　山領 まり
〈評議員〉
田邉 三郎助　荒木 伸介
〈本部事務局〉
八木 三香（事務局長）　松本 洋子
〈関西支部事務局〉
伊達 仁美（事務局長）　加藤 亜沙子
〈編集協力〉
嶋根 隆一（伝世舎）